

奥穂高

上高地から新宿まわりで横浜までの直通バスが一往復だけある。八月十日予定通りというか、予定に反するというか、とにかくまわりあわせてそれに乗れたものだから夕方五時というところ、中央高速を東上中、笹子トンネルを抜けるあたりであった。

今まで上高地に入るのに夜行の直通バスを利用したことはなかったが、今年はふとその気になって、八日午後九時三十分横浜駅東口発というのに乗ってみた。新宿を廻って九日早朝六時に上高地に着く。その間に三箇所でトイレ休憩があつて、その度にマイクの声で起こされたのと、座席が窮屈でどうにも寝た気がしなかった。夜行バスは失敗だったと後悔した。

それでも上高地から明神、徳沢、横尾とこのあたりまでは殆ど平坦な遊歩道ではあるし、明け方から快晴で明神岳や前穂高、屏風岩の大景観が朝の光を浴びてくつきり眺められてすこぶる爽快だった。しかし横尾から涸沢に入ってからからの登りで睡眠不足が応え始めた。疲れは少しも感じてないのに猛烈な眠気で頭が呆となり、しまいには手足が萎えたみたいになる。

予定では今日の行程は八時間。午後二時頃には奥穂直下の穂高山荘まで登っておく筈だった。ゆっくり登れば何のこともないと思うけれど、こう眠くはいかにも大儀である。たどり着いた涸沢ヒュッテから奥穂の稜線を見上げながら、涸沢泊まりに予定を変更する口実をあれこれ思案する。

まず単独行であること。無理に登って明日に響いては困る。一旦登れば自分で降りるしかないのだから。そしてトシ。なんと云おうがもう若くはない。今まで快適だった登攀路が体調によつては突然難路に変わることもあるうじゃあないか。更にまた天候、ここまでは雲ひとつ無い快晴だったが午後は必ずガスが湧いてくる。昨日は雷雨があつたというではないか。現に頂上はもう雲の中に入っている。今稜線に急いだところで何も見えないだろう。第一こう眠くしては登高を楽しむ境地に程遠い、折角の夏休みだから楽しく登るべきだ・・などなど。

未練がましく腰を上げて、涸沢ヒュッテからののろると五分歩いているうちに結局ガンバリズムは棄てられて、北穂への分岐点の涸沢小屋に泊まる方針を確立した。小屋は眼と鼻の先だから到着時はまだ陽の高い正午である。早速倒れるようにして夕方まで昼寝をむさぼる。

でも夕方すっかり眠気が取れてみると、ロクに登っていないのに計画を縮小したことがうしろめたく、このままだと今年の山行は不完全燃焼のままかと、渦巻くガスに隠れよう

としている暗い沢の上部の岩峰を見上げながら沈鬱な気分である。

いつもだと満員の山小屋では消灯後もなかなか寝つかれず、他人の歯軋りや鼾を聞きながら無為に横になっていることが多いのだけれど、この夜はよほど睡眠不足が応えていたらしく、たっぷり昼寝をしたにもかかわらず、夕食後ヘッドランプで地図を眺めていたらまた眠くなって七時半には眠り込んでしまった。

十日四時半、醒めてみると昨日にも増しての好天でしかも心身ともに絶好調。「ようしこい」と登ることにする。昨日二時間分をサボったので今日の行程は十時間になったけれども、登りは二時間だけであとは高地に下る一方だから十五時くらいには降りられるだろう。

ところで「五時通信」の五時を私は夕方の五時と思い込んでいたけれど、元はといえば午前五時、つまり一日の始まりの時刻のことだというじゃないですか。この春「通信」の意義について発言が相次ぎ騒然（と言っただけでも）なるとき、神田さんのそういう指摘がポツンと載って、なんだかポカンとしてしまって、そしてひどく可笑しくなったことがあります。

まあどちらでも一向構わないことだけれど、農耕に縁の遠い生活を送っている人には朝五時を仕事始め、一日の暮らしの出発と意識する人はあんまりいないのではないかという気がする。

私も五時に起きていることは滅多にないけれど、この日は見事に四時半起床、ちゃんと顔も洗い、朝飯も食べ、雉も撃って悠然と出発の準備をしていた。

○五一五酒沢小屋出発。○七三〇奥穂頂上着。体調すこぶるよろしい。昨日一寸諦めかけていたので、嬉しくて楽しくて胸が膨れるような想い。ここまでくればあとは北アルプス三急登のひとつ（とガイドブックに書いてある）である重太郎新道を、しかし、登るのではなく下るのだから楽なもので、一瀉千里に一〇三〇岳沢小屋、一一五〇河童橋。なんと予定より三時間も早く下ってしまって、この分だと一二〇〇発の横浜行きのバスに間に合いそうなのでかえって慌ててしまった。

計画の段階では間に合うようなら帰路もこのバスでと考え、往路の夜行で懲りてしまつて復路のバスは敬遠したくなり、でも乗れたら一番便利だと再考し、最後は昼寝作戦発動ですっかり諦めて念頭になかった。そのバスに何の因縁か丁度間に合つて、定刻発車しかかっているところを押し留めて訊くと空席ありと笑顔の返事。そういう事の成りゆきで乗ってしまった。

松本まで出て来てみると四方の空に積乱雲が湧き立ち、頭上遙か高くに巻雲が流れて安曇野の澄んだ青空は雲の大饗宴である。しかし変化もめぐるしくて、何度かバスが方向を改めるうちに北アも南アもネズミ色の雲の下になってしまい、ただ八ヶ岳だけは北端の蓼科からずっと晴れ渡って西陽を浴びている。

バスが笹子トンネルを抜けるといきなり激しい雨音に包まれて耳に蓋をされたようになった。夕立だった。

(五時通信 第一一九号 一九八五年九月十日)